

個人雑誌不機嫌録

「伊賀一筆」第一号は十月二十一日、江戸川乱歩の誕生日に発行するつもりでいたのだが、世の中とかくままならない。どういう巡り合わせか、十月二十一日にはこんな文章を書く羽目になってしまった。年内に発行できるかどうかも不安だし、それ以前に、発行によっていったいどれだけの赤字を抱え込むことになるのか、それが何より心に重い。乱歩が生まれて百二十年というおめでたい年である。不景気な話は禁物だろう。

とはいえ、今年三月に記念すべき市制実施六十周年を迎えたわが名張市も、なんだかずいぶん不景気ではある。長きにわたる財政難でしているのはまだいいとしても、行政運営の根幹を支えている癒着結託構造はいまや病膏肓とも呼ぶべき状態で、七月には相当たちのよろしくない筋の市民が市職員と水面下で手を結び、税金を不正支出させていた事実が発覚した。

それでも足りない税金を、癒着結託相手たる相当たちのよろしくない筋の市民にちよっと脅されたくらいのもので、右から左へすんなり貢いでいたというのだからいだけない。公務員の眼中には市民などまるで存在していないことなど重々承知しているつもりでも、名張市には絶望するしかないらしい、とあらためて思わされる。

行政の内部では、市長と副市長がこの十一月から向こう一年間、給料を四〇%減額されるというペナルティがすでに決定しているが、不正支出に直接関わった市職員と市民の処分は警察任せということになる。なんなんだそれは。

そんな状態だから、というか、そもそも名張市なんだから、というべきか、乱歩生誕百二十年の記念事業も名張市には何ひとつできなかつた。名張市立図書館も同様で、しいてあげれば名張地区公民館が十月に記念講演会を主催し、私が駄弁を弄したのが唯一の記念事業だったことになる。

毎度おなじみの癒着結託方面はというと、乱歩蔵びらきの会が十月、「乱歩黒テントの世界」なるイベントを催したが、例によって市民には見向きもされぬありさまだったらしく、あれでは自己顕示でさえないただの自己慰安に終わっているのではないかと、他人ごとながら案じられる。

いやはや、乱歩の誕生からちょうど百二十年たった日に、どうしてこんな不機嫌な文章を綴らなければならぬのか。いよいよ滅入ってくる次第だが、ともあれ最初で最後、生涯に一冊だけ発行する個人雑誌の編集後記である。いまはただ、早く校了にしなくちゃという気持ちでいっぱいです、と申しあげておきたい。

(中 相作)